

《書評》

『観光が世界をつくる：  
メディア・身体・リアリティの観光社会学』

須藤廣\*・遠藤英樹\*\*・山口誠\*\*\*・松本健太郎\*\*\*\*・神田孝治\*\*\*\*\*・  
高岡文章\*\*\*\*\*編、明石書店、2023年

寺岡伸悟†

「たかが観光、されど観光——日本の観光社会学をリードしてきた、ある研究者はいう」（3頁）

この「ある研究者」とは、須藤廣氏である。北九州市立大学や法政大学等で教鞭をとられた須藤氏は、立命館大学の遠藤英樹氏とともに日本の観光社会学の黎明・確立期を牽引した。本書は、2005年に両氏が著した『観光社会学』（明石書店）の学恩を受けた研究者たちが須藤氏の退職を機に執筆した論考集である。

さて、冒頭のフレーズ「たかが観光、されど観光」に戻ろう。このフレーズこそ、まさに両氏が牽引してきた日本の観光社会学を象徴するフレーズであり、また本書を一貫するメッセージともなっている。編者の一人山口誠氏が本書の編集方針を「はじめに」で次のように記している。それは観光研究に留まらず、社会と人間を探究する姿勢として普遍性をもつ部分であるので、長い引用を許されたい。

それゆえ必要なのは、観光の両義性を特別視して語るのでも、また観光の独自性を前提視して研究するのでもなく、近代社会に根ざした両義的な実践の一つとして、観光を捉えることだろう。そのうえで観光における相反した二つの作用を過度に一般化することなく、個別かつ具体的に分析し、そうした観光の両義性のうちに見える近代社会のメカニズムを文脈的に問うことである。（4-5頁）

こうした学的態度は、本書の編集方針となっている。ふたたび山口氏の記述を引用させていただきたい。

---

\* 北九州市立大学名誉教授

\*\* 立命館大学文学部教授

\*\*\* 獨協大学外国語学部教授

\*\*\*\* 獨協大学外国語学部教授

\*\*\*\*\* 立命館大学文学部教授

\*\*\*\*\* 立教大学観光学部教授

† 奈良女子大学研究院人文科学系教授

tera@cc.nara-wu.ac.jp

ここ〔本書〕では、すべてを一網打尽に説明し尽くす概念や理論枠組みを求める道ではなく、須藤と遠藤が歩んできた道に倣い、次の方法で各章のテーマを探求することに努めた。すなわち（一）過度な一般化を避けるため、個別で具体的なメディア表現（映画、小説、音楽、ゲームなど）とそれに関係する観光の事例を取り上げ、（二）そこに観察できる「スードウ・ワールド」あるいは「観光化する社会」の生成プロセスを考察することで、（三）観光とは何か、そして観光を研究することとは何か、について、（四）「私」という、やはり個別で具体的な地点から文脈的に問う、という道である。（10頁）

こうして、15の論考から本書は編まれた。各章が寄稿者たちの、観光をめぐるアカデミック・ジャーニーとなっている。寄稿者の多くと個人的にも親しくさせていただいている評者は、ページをめくるたびに淡い感興を覚えた。章構成は以下のとおりである（以下、敬称略）。

第1章 伝わらないことの快楽（須藤廣）

——映画『ロスト・イン・トランスレーション』から観光経験について考える

第2章 観光の加速主義・宣言（遠藤英樹）

——あるいは逃走のマジカル・ミステリー・ツアー

第3章 スードウ・エンドの観光社会学（山口誠）

——「一九八三年のエドガー」から考える

第4章 ウォルトがディズニーからいなくなる日（新井克弥）

——融解・流動化する TDR のテーマ性

第5章 旅先の「相乗り」コミュニケーション・ツーリズムの両義性（鍋倉咲希）

——恋愛観察バラエティ『あいのり』に見る旅先の共同性から

第6章 イメージどおりを確認されること／演じること（鈴木涼太郎）

——浦和レッズサポーターによるアウェイ観戦旅行へのまなざし

第7章 「港町横浜」の観光的リアリティ（堀野正人）

——アニメ映画『コクリコ坂から』を通じて

第8章 『めがね』を通して旅を見る（神田孝治）

——「自由」と「たそがれる」にピントを合わせて

第9章 困難な観光（山本朋人）

——モビリティに課せられた「複数の現実」と「他者性」について

第10章 リゾート法がもたらしたもの（千住一）

——雑誌『公害研究』掲載の論考から

第11章 観光の「ユートピア」、観光の「ヘテロトピア」（濱野健）

——メディアと観光の連関に見る現代社会の見当識（の可能性）

第12章 『ゴールデンカムイ』とアイヌ観光（須永和博）

——北海道平取町二風谷の事例から

第13章 トラベル・ライティングが生み出す観光的想像力（安田慎）

——ウィルフレッド・セシガーが描き出す観光的リアリティのコンネクティビティ

## 第14章 映画の偶景／偶景の映画（松本健太郎）

——『インド夜想曲』におけるガイドブック表象を手がかりに

## 第15章 パリの墓地を歩く（高岡文章）

——幾重もの疑似イベントをめぐる観光社会学

いずれも観光社会学の中心にいる執筆者たちであり、現在の観光社会学を知ることできる。そしてすべての章がなんらかのかたちでメディア現象（映画・旅行記・アニメ・テレビ番組・メディアで拡散されたイメージ）などを考察の出発点としている。それらを用いながら、観光の「スードウ（疑似）」性（第2、3、4章など）、ホスト・ゲストという古典的枠組を変容させる「再帰性」（第5、6章）、スードウ性と再帰性の共犯関係（第7章）、「まなざし」論（第8章）、「他者性」（第9章）、「社会的構築性」（第10章）、情報的環境が卓越する現代の「異質性」（第11章）、観光というフィルターをとおした「出会い」（第12章）、「原風景の表象」（第13章）、「ルートの生成」（第14章）、「観光行為の生成」（第15章）など、現代観光学の重要な学的観点が論じられている。評者はここで各章を1概念で表象したが、本書を読んでみていただければわかるように、ここに挙げた複数の概念が相互に関わり合っている様も含めて各章は書かれており、それらの関係性の総体を眺めようとするのが、すなわ「現代観光学」を理解することになると評者には思われる。

さらに重要なことは、各章が上記に挙げた概念で、事例を説明し尽くして「完結」しているのでは決してないということである。それぞれの章で出された説明概念がある程度の説明力を持ちながらも、同時にそれが内破される様も、各章はしっかりと視野に収めている点に読者は注意を払っていただきたい。私たちの「まなざし」や「行動」、「出会い」、経験を強く水路づけながらも、同時にそこからのズレや異化が生じること、そしてそこにも観光者のもうひとつの横顔が現れること——たとえば第15章にある、フランスの墓地に地下鉄の切符が大量に置かれるように——、これこそがいま観光を考えることの重要性であり、『観光が世界をつくる』というタイトルの両義性——観光によって私たちは水路づけられる一方で、あらたな何かを作り上げる余地も得る——に気づくことだと評者には思われた。

さて、各章の紹介においてあえて第1章ははずしておいた。冒頭にも書いたように、本書は須藤廣氏の退職記念の論集という性格を有している。第1章は、その須藤本人による「伝わらないことの快樂（副題略）」である。須藤がこれまでの論考や講義などで取り上げてきた一本の映画をもとに観光経験とは何か、に迫る論考となっている。このなかで須藤は「観光することとは、齟齬や誤解というノイズを引き受けつつ、「伝わらない」人間たちが、お互いに通じ合うかたちにイメージを組み換える「異化」（自他の異質性に気づくこと）の「ゲーム」をすること」（16頁）だと述べている。これは須藤による観光定義の一つである。

本書にはもう一つ、須藤の観光定義が紹介されている。安田による第13章で引用された次の一節である。「人の移動および空間の共有の仕方がある方向に誘導することによって空間と時間の意味を生成するメディア」（須藤, 2014: 46）

この二つの定義を並べたとき、現代観光の核心にある「観光の両義性」が見事に表現されていることに驚かされる。

評者も、観光研究を志してすぐ、須藤や遠藤の著作に学んできた一人である。観光を研究してい

る、たとえば、無条件に観光を称揚しているのか、と言われたり、経済効果さえあればよいのか、などと、ときにひどい誤解を受けてきた。しかしそうしたなかでも観光研究を続けられたのは、須藤や遠藤の、上記のような両義性をしっかりと視野に入れた研究姿勢を目にしてきたからだ、と思う。須藤の学恩を受けた一人として評者も心から感謝したい。

最後にあらためて記しておこう。

「たかが観光、されど観光」

#### 参考文献

須藤廣（2014）「観光メディア論の試み——観光的リアルの構造とその変容」『観光学評論』2巻1号，43-54頁．